

Mayo Clinic 留学記

留学までの道のり—期待と不安

眞野福太郎

はじめに

私は以前から加齢黄斑変性の外科的治療(網膜色素上皮移植)に強く興味をもっており、知り合いの韓国の先生が留学されたこともあり、当時Emory大学のchairmanだったTimothy Olsen先生のところにapplyしてSkypeで面接を受けることになりました。アメリカと日本の時差があるので夜の10時頃からネクタイを締めて(下はパジャマ)今か今かと待っているうちに11時になり、11時半になり、ようやく面接が始まりました。部屋の壁には自分の言いたいことを英語でメモしていましたが、うまく伝えられたかはわかりません。Olsen先生からは少し寒いところに移動することになったが、ついて来る気はあるか? と尋ねられ、私は趣味がゴルフなので、Emory大学のあるオーガスタでラウンドするのを期待していましたので、少し残念に思いましたが、もちろん二つ返事でOKといたしました。実際、彼が移動になったのはミネソタ州のMayo Clinicで少し寒いどころか冬はマイナス40度の世界でした。

留学後3人のボス× iPS derived RPE vs. Autologous RPE transplantation

Mayo Clinicは南北戦争の時代に傷ついた兵士を治

Fukutaro Mano
近畿大学医学部眼科学教室
E-mail: manofuku666@gmail.com

療する病院にはじまり、今では全米No.1と評される病院です。病院の規模はとて大きく、冬の寒さを凌ぐため、すべての病棟と近隣のホテルが地下道やskywayで繋がっています。病院を大きくした有名なMayo兄弟は外科医で、私財を投げ打って積極的にヨーロッパへ手術見学を行い、自分達の患者さんへの治療向上に努めたという話です(写真1)。Olsen先生は臨床の傍ら、私にEye-bank eyeを使った研究や網膜色素上皮をclampするdeviceの研究を指導してくれました。自分の書いた研究計画書が採用されて、ミネアポリスにあるVitreoretina Surgery Foundationという組織から幸いにも小さなgrantを獲得できて、研究を進められたことも大変よい経験になりました。また空いた時間で、Dr.MarmorsteinのlabでiPS細胞から作った色素上皮を豚の眼に移植する手術を手伝いました。当初はこの日本人(私)は何ができるのか? と言われ、基礎的なbackgroundがない私は焦りましたが、アメリカ人



写真1 Mayo兄弟と私